

# A帯ワイヤレスマイク 新周波数対応機器試用 実績に関するレポート

Vol. 5  
2015.03

A型ワイヤレスマイクの新周波数帯移行関連の情報に関しては、(一社)700MHz利用推進協会のHPや、全国で実施しましたテスト会等におきましてお伝えしてまいりましたが、今回新機器を実際にお使い頂きました感想や周波数移行に関する率直な思いを伺える機会がございましたので、その内容を皆さんにお届けいたします。このレポートが、免許人の皆様において、周波数帯移行に関する手助けになれば幸いです。

一般社団法人700MHz利用推進協会

インタビュー：一般社団法人700MHz利用推進協会



電波法の改正により定められた「特定ラジオマイク(A型ワイヤレスマイク)」の新周波数帯への移行。「特定ラジオマイク(A型ワイヤレスマイク)」は2019年3月31日までに、ホワイトスペース帯(470~710MHz)／特定ラジオマイク専用帯(710~714MHz)／1.2GHz帯(1240~1260MHz)のいずれかの帯域に移行しなければならない。新周波数帯への移行は、PAカンパニーや設備業者だけでなく、教育機関にとっても切実な問題である。ここで紹介する音響系の大手専門学校、日本工学院八王子専門学校もそんな教育機関の一つ。クリエイティブ分野の専門の学部をいくつも擁し、音響系／放送系の技術者を育成している同校には、多数のワイヤレス・システムが導入され、教材として活用されている。新周波数帯への移行については、どのようなスタンスで取り組んでいるのか、担当者に話を訊いてみることにした。対応していただいたのは、日本工学院八王子専門学校 ミュージックカレッジ コンサート・イベント科で教鞭をふるう小峰建氏である。

■クリエイティブ分野で即戦力となる人材を育成する日本工学院八王子専門学校

——はじめに、日本工学院さんの沿革をおしえていただけますか？

小峰氏 本校の創立は戦後すぐ1947年のことで、まもなく創立70周年を迎えます。最初は東京蒲田の技術者養成学校としてスタートし、その後新設された芸術学部の音響芸術科と放送制作芸術科という2つの学科で、音響技術系の人材を育成してきました。舞台音響関係は音響芸術科内のイベントPAコースで行っていたのですが、人数が多くなってきたこともあり、約20年前に開設された八王子キャンパスの中に新しい学科、コンサート・イベント科を

新設しました。現在、日本工学院のキャンパスは蒲田、八王子、北海道の登別にあり、蒲田キャンパスと八王子キャンパスにあるミュージックカレッジ内のコンサート・イベント科とレコーディングクリエイター科で音響技術系の人材を育成しています。また、蒲田キャンパスと八王子キャンパスのクリエイターズカレッジ内の放送・映画科では、放送技術系の人材を育成しています。

——最近ですと、コンサートSR系の技術者を育成する専門学校は増えていますが、日本工学院さんの特色というところ？

小峰氏 どの学校もアナログとデジタルの両方の技術を教えているでしょうし、カリキュラムとしてはそれほど変わらないのではないかと思います。我々の場合、そういった音響技術もしっかり教えているのですが、その上で“人間力”の育成に力を入れていることが特色かもしれませんね。卒業後の社会で必要となるのは技術だけではなく、挨拶や礼儀、社会の構造や税金に関する知識など、社会人としての一般教養がどんな現場でも求められるのです。雇用する側から言えば、たとえ技術力があっても、社会人としてのルールやマナーが分からない人間は使いにくい。我々は技術力だけでなく“人間力”という意味でも、即戦力となる人材を育成したいと考えているんです。

——学生さんは、高校卒業後に入学される方が多いのですか？

小峰氏 そうですね。ほとんどの学生は高校卒業後に入学してくる若者たちです。ですから年齢で言えば、18~19歳という感じですね。ただ、ここ5年くらいは大学卒業後や社会人を経て入学してくる人たちも増えています。

——卒業後の進路は？

小峰氏 私が担当するコースで言えば、PAカンパニーやホール管理の会社など、いわゆるPA系の会社に進む学生が多いです。世間的にはあまり景気は良くないと言われていますが、PA業界の求人はここ10年くらい横ばいで、特に減っているという感じはありません。レコーディング業界は確かに厳しい感じですが、ライブ業界は昔と変わらず、求人はそれなりに多いと思います。

■計22波運用しているワイヤレス・システムを今夏新周波数帯に移行予定

——ワイヤレス・システムに関しては、授業の実習で使用されることが多いのでしょうか？

小峰氏 そうですね。やはり昨今の現場を見ると、ワイヤレス・シス

テムは非常に多くの場面で使われており、その技術や取扱いに関する知識は必須だと考え、教材の一つとして取り入れました。具体的には、電波やチャンネル、バッテリーの電圧といったワイヤレス・システムを運用する上での基礎知識を教え、また授業の一環として赤坂ブリッツといった現場に出て、実際のホールで使用させています。やはり、現場で使用してみないと、その使いこなしについては分からない部分も多いので。

#### ——現在授業で使われているワイヤレス・システムについておしえてください。

**小峰氏** コンサート・イベント科でSHUREのシステムを4波、テレビ関連の人材を育成する放送・映画科でRAMSAのシステムを18波、合計22波のA帯のワイヤレス・システムを運用しています。そして現在、この22波のワイヤレス・システムの新周波数帯への移行を進めているところです。

#### ——新周波数帯への移行は、いつ頃から検討を始めたのでしょうか？

**小峰氏** 新周波数帯への移行が発表され、ニュースになった3年ほど前から気にかけていました。同業の仲間うちでも話題になっていましたね。具体的に動き出したのは約2年前の9月ごろ、特ラ連(現在の(一社)特定ラジオマイク運用調整機構)から連絡をいただき、移行に関しての説明をしていただいたのがきっかけで、そこから理解を深めていきました。当時は税金のことなど、法律的に明確ではない部分がまだ多かったのですが、いずれはやらなければならないことなので、情報はずっと収集していました。

#### ——これから移行するにあたって、何か不安な点がありますか？

**小峰氏** つい先日、新周波数帯のシステムをフル・セットで貸していただき、学生や講師の先生方と一緒にテストしてみたんですが、レーテンシーが一部気になった以外は、現在使用しているSHUREのシステムに比べてそれほど大きく変わった印象はありませんでした。ですので、機材面での不安はそれほどありません。そのときは、A帯、B帯、新周波数帯合わせて14波くらい同時に使ってみたんですが、混信もありませんでしたしね。

ただ、これは不安な点とは違うのですが、じっくり考慮しなければならない点があるとすれば、どの機材を導入すべきかということですね。ここはあくまでも学校ですので、教材として考えた場合、学生たちが社会に出てから実際に現場で使用する機材を教える必要があります。現場でほとんど使われていない機材の使い方を覚える意味が無いので、どのランクのどの機種を導入するのがベストなのか学生たちの将来を考えて導入機材をじっくり選定する必要があると思っています。

#### ——現在は導入機材を選定中ということでしょうか。

**小峰氏** そうですね。去年の11月ごろにもメーカー5社から様々な機種を同時にお借りして、入念にチェックを行いました。まだどのメーカーのどの機種を導入するか決定していないのですが、教材として優れているものを導入したいと考えていますので、慎重に選定したいですね。音が良くて現場でプロが使うには最適なものでも、機材の重量が重くて、学生たちが教材として使うには向いていないものもありますからね。このあたりは教育機関ならではの選定ポイントになるかと思います。最終的には、なるべくプロの現場で使われていて、外部のホールに持ち込んだ場合でも対応できるメーカーのものを導入したいと考えています。

#### ——導入スケジュールに関しては何？

**小峰氏** 当初は新年度が始まる4月には新機材で授業をスタートしたいと考えていたのですが、いろいろとクリアしなければならない問題があり、おそらく6~7月くらいのタイミングで移行することになると思います。

#### ——先日行われたイベントでは、新周波数帯のイヤール・モニターが使用されたそうですね。

**小峰氏** 今年1月、オリンパスホール八王子でコンサート・イベント科の卒業ライブが開催されたのですが、そこではアーティスト6名分、モニター・マン2名分、プラス予備回線で、計9本の新周波数帯のイヤール・モニターを使用しました。当校ではイヤール・モニターを所有していないのですが、アーティスト・サイドからの要望もあり、メーカーさんのご協力で全セットお借りして運用しました。実際に使ってみると、音が良いだけでなく取り扱いも簡単で、これは学生用の教材としてもいいなと思いましたね。当日はアドバイザーとして来ていただいた方々も新周波数帯のイヤール・モニターはとても音が良いとおっしゃっていました。会場のオリンパスホール八王子は八王子の駅前にあるんですが、既存の周波数帯のシステムとも共存できましたし、混信などのトラブルもまったくありませんでした。イヤール・モニターは現在、プロの現場では当たり前の機材になっていますので、今後当校でも教材として導入すべきなのではないかと考えています。ステージ上のプレーヤーの耳を守るという意味でも、イヤール・モニターは重要な機材になっていますからね。

#### ——学生さんはどんな感想をおっしゃっていましたか？

**小峰氏** 全部で6機種くらい同時にチェックできたので、学生たちもワクワクしていた様子でした。こっちの方がロック向きだとか、こっちの方がS/Nが良いとか、いろいろな評価をしていましたよ。中には3ミリ秒の遅延に気づいた学生もいたり。最新鋭の機材の研究としても良い機会になったのではないかと思います。

#### ——日本工学院さんに限らず、他の教育機関も新周波数帯に移行しなければならないわけですが、何かアドバイスはありますか？

**小峰氏** 我々もまだこれからですのでアドバイスできる立場には無いのですが、ワイヤレス・システムという機械は“電波”という目に見えないものを扱うものなので、皆不安があるのではないかと思います。たとえテストで問題が無かったとしても、導入後に本当にトラブル無く動くのか、絶対に心配になりますしね。ですから新周波数帯に関しては、導入事例とトラブルが発生した際のシューティング方法についての情報が蓄積してくると、皆安心するのではないかと思います。でも、いずれは切り替えなければならないものですし、そろそろ検討すべきタイミングにきているのではないかと思いますね。

#### ——本日はお忙しい中、ありがとうございました。

